

どっちがじゃなくて、 どっちも素晴らしい

インタビュー 在日の落語家 笑福亭銀瓶さんの挑戦

ハングルを駆使して日本の伝統芸能である落語を、日本のみならず韓国にも広げていこうと精力的に活躍されている笑福亭銀瓶さん。二月におこなった大阪朝鮮高級学校と白頭学院建国中学校・高校の生徒たちや先生を前にしたハングル落語の公演も大好評でした。

在日コリアン三世として神戸で生まれ、笑福亭鶴瓶さんに弟子入りして一七年間をへて、いま新しいジャンルへとチャレンジをしている銀瓶さんにこれまでの歩みと落語にかける思いを語っていただきました。

在日コリアンとして味わった挫折

僕は子どもの時から人前に立つて笑わずのも好きで、本当は将来は学校の先生になりたかったです。塾には行ってなかったですが、自分で計画を立てて学校の宿題以外に一日二時間ぐらい勉強しました。そういう勉強する癖をアボジ（お父さん）がつけてくれたんですが、何でそこまで勉強したかというところ、それは教師という目標があったからなんです。それで神戸高校に行つて神戸大学の教育学部に行くという自分なりの計画を立てて、高校を受験するときにアボジに神戸高校に行きたいと言ったら、「やめとけ」といわれました。「何でや。僕は教師になりたいんや」といいましたら、在日は国籍条項があって教師にはなれないといわれ、大変なショックを受けました。在日であることは子どもの時から

知っていて、別にいじめられたこともなく嫌ではなかったんです。でも中学三年生の時に初めて教師になれないという在日であることの不自由さを感じたんです。

それでアボジにエンジニアになれと勧められて、国立明石工業高等専門学校で電気工学科に通ったんですが、入つてすぐにここは僕が来るころじゃないなと思つたんです。もともと教師になりたいと思つていたので、それとたんに勉強をしなくなりました。それまでの反動もあつたんですが。

それでも何とか留年せずに進級をしたんですが二年が三年ぐらゐの時に、この学校を出て将来どうなるのかということを考えました。嫌々学校に通つて卒業して、それで就職してもまた嫌々働かなあかんと。生活は安定してもそれで人生楽しいんだらうかと自問自答しました。それで自分が本当に打ち込めるものはいったい何なんだらうかと真剣に考えてふつと出てきたのがこの世界だったんです。人の前に出て、人を笑わせるということだったんです。その時誰かの弟子にならうと思つて頭に浮かんだのが、師匠の笑福亭鶴瓶でした。

笑福亭鶴瓶師匠との出会い

当時は落語をやるつもりは全然なくて師匠のことはタレントと思つていました。たぶん世間の皆さんもそう思つていたんじゃないですか。



1967年生まれの在日コリアン3世。1988年に笑福亭鶴瓶さんに弟子入り。落語家として舞台やテレビなどで活躍。昨年秋からハングルを勉強し、唯一ハングルで落語公演をおこなう。

でも師匠はラジオとか聞いても、リスナーさんの悩みに親身になって相談しているのがわかりましたから優しい人だと思いついて、それで弟子入りしようと、高専の五年生になった春に師匠のラジオ番組があるラジオ大阪に行つて待つていたんです。師匠が来られて、僕が「お忙しいところすみませんが、ぜひ聞いていただきたいことがありまして」といいますと、「いいよ」とすぐにラジオ大阪に入れてくれました。そこで僕は自分が何者かをはっきりさせないといけないと思つて、学生証と外国人登録証を見せました。すると師匠はほくが在日でいじめを受けていて、その相談だと思つたそうです。

弟子にしてほしいと言いましたら、最初はもう五人もいて、弟子は取らないようにしてるといわれました。それでも師匠が帰りにタクシー

と一緒に送つてくれました。その時もいろんな話をしました。一番印象に残っているのはどんな本を読んでいるかという話でした。僕はその時に司馬遼太郎さんの「龍馬がゆく」の話をしました。その本の中に、「世に生を得るは事を成すにあり」という言葉が出てきます。この言葉にすごく感銘を受けたのも、この世界に入ろうと思つた一つのきっかけでしたから。師匠とそういう話をしながら、師匠と別れるときにお礼を言いますと師匠が「君ともう一度会いたい」と言つてくれたんです。四ヶ月後、もう一度訪ねていくと、「卒業したら来なさい」といつてくれたんです。それで弟子入りを許されて、一九八八年三月二十八日から弟子修行の生活が始まりました。

落語のおもしろさに目覚めて

師匠の家の近くにアパートを借りて独りで住んで、アルバイトをしながら家賃や光熱費を払つて、毎日朝七時半ぐらいから夜九時、一〇時くらいまで師匠の家に居るんです。やることといえば家の掃除や買い物なんかでした。これを三年間やるんです。それで僕がびっくりしたのは師匠をタレントだと思つていたのに、書齋を見ますと落語のレコードや本がいっぱいあったんです。それで合間に落語を聞くうちにあれっと思ひました。師匠はいまタレントとして活躍しておられるけれども、その芸の根底にあるのは落語じゃないかと。それで師匠に近づいてい

くためには僕もきちんと落語を勉強しないとだめだということをわかつたんです。同時に僕も落語を聞きながら、その魅力にはまつていったんです。

そうこうしていますと師匠が、一年もたつたぐらいでしようか、落語の稽古をつけてくれるようになったんです。それもすごく楽しかつたですね。そして稽古をつけてもらえるようになると落語家の先輩方から、銀瓶が落語を覚えよつたということで、舞台上呼んでくれるようになり、実際に着物を着てお客さんの前で落語をするようになりました。当時は受けませんでした。それが、それでも楽しかつたですね。それに我々は若いときは先輩の落語会のお手伝いに行くんです。着物をたんだりお茶を出したりして。そこにいるんな話も聞いたり、そうこうしているうちに落語家がかっこいいと思うようになつたんです。最初は落語のらの字も知らなかつた僕が、だんだんはまつていつたんです。

そのきっかけを与えてくれたのはすべて師匠だつたんです。落語があるから僕は韓国語を勉強して、韓国語で落語をできるんです。

ハングル落語へのチャレンジ

去年の秋に自発的に真剣に勉強して、落語を韓国語でやろうと思ひ、最初に師匠に相談したんです。というのは韓国語でやる以上、もともとの落語をいじる訳ですから師匠の了解を得ない



る落語を在日の僕が韓国語で伝えるんです。そうして落語っておもしろいと韓国人が思ってくれたらいいなと思います。これはやっぱり落語家でありながら在

とだめだと思ひまして。すると師匠は「それはいいことや」と大賛成してくれました。一月に学校でやった公演で皆さんに喜んでいただいたこともそのつど師匠には報告をしています。そのことを誰よりも師匠が一番喜んでくれています。僕は日本の文化である落語で生きていますが、それとは別にしても日本が大好きなんです。日本語もきれいですし、伝統工芸や、風景、料理、すばらしいと思います。それに落語は日本人が頭のいい民族だから成り立つ芸だと思っています。やる側も聞く側も。つまり何の舞台装置もないところで話とイメージだけで楽しむわけですよ。もちろん韓国人も素晴らしいし、韓国語、韓国料理、衣装、すべてすばらしいと思います。これはどっちがじゃなくて、どっちも素晴らしいんだと。僕は在日だから日本と韓国の両方を知ることができると、両方の素晴らしさを感じることがができます。だから韓国人に日本の文化である落語を在日の僕が韓国語で伝えるんです。そうして落語っておもしろいと韓国人が思ってくれたらいいなと思います。これはやっぱり落語家でありながら在

日の僕がやる、大げさにいつてしまおうと使命感なんじゃないかなと思います。

僕はずっと前から在日に生まれてよかったと思っていますし、いまこうして韓国語で落語をするようになって一層そう思っています。僕が師匠の弟子になったのも在日だったからだと思います。僕がもし日本人だったら、子どもの時に思い描いていた教師の道を進んでいたわけです。アボジからも教師になれないとはいわれなかったでしょう。本当に教師になれたかどうかは別ですが、少なくともお笑いの世界に足を踏み入れようとは思っていなかったと思います。だから僕はすべてががつながっていると思っています。やっぱりチャレンジすることは大事だと思います。僕はこの韓国語落語に取り組むようになって落語家になって初めてチャレンジしたという実感を持っています。僕は落語家になって正直頑張ったという実感はなかったんです。運だけで仕事がありましたから。野球にたとえますと毎日素振りもしないのに試合には出ていた状態ですね。だけど打率は二割五分なんです。ずっと二割五分だったら結局いつかは試合に出られなくなるでしょう。去年の夏ぐらいに本当にそう思いました。それで韓国語落語に取り組むようになったんです。毎日勉強、素振りをして、その上で全試合に出場して三割、四割打てるようになりたいと思っただけです。やっぱりトライすることが大事ですね。

九月には韓国で落語をやることになってます。僕がよく知っている構成作家の方の弟さんがある大学で日本語の教師をしていまして、それが縁で、その大学で、日本語と、韓国語で一席やらせてもらうことになっていきますし、どんどんいろいろなところでやっていきたいですね。

だからこれからはもっと言葉を勉強しよう、春からは上本町にあるMERICインターナショナルカレッジというところで語学教室に行くことにしているんです。それとネタをつくらせてどんどん翻訳して覚えて、増やしていきたいですね。

笑福亭銀瓶さん出演の落語会の予定

はやかぶの会・第二回東京公演

とき 五月二八日(土)午後六時三〇分開演

ところ 東京・お江戸日本橋亭

料金 前売り二〇〇〇円、当日二五〇〇円

お問い合わせ はやかぶの会事務局

〇七二九(五六)七九五一

電話は一一時から三時まで

第六七回はやかぶの会

とき 五月三〇日(月)午後六時三〇分開演

ところ 難波・B1角座

料金 二〇〇〇円

お問い合わせ 上方落語協会

〇六(六六四四)三六一九